

第 513 回友の会講演会 質問と回答

第 513 回友の会講演会（6/5 開催）はオンライン配信限定で開催いたしました。
参加者のみなさまからの質問と講師からの回答を、以下のとおり公開いたします。

（2021/07/01）

■ 質問者 A 様

現在、新聞や放送など未だかつてない規模でコロナ疫病が世界規模で生活に入り込み、社会意識を変え人間が制御できない状況にあります。その渦中であって今回のテーマ設定で時流にあった内容でした。ところで祭りにおける男性の役割とカースト制とのすみわけどうなっているのでしょうか？

<講師回答>

講演会でお話したシータラー・アシュタミーの儀礼は女性のみが参加し、男性が参加する姿はほとんど見かけません。また、この儀礼には男性の司祭も参加せず、全てが女性たちだけで行われています。シータラーマターに限らず、北部インドの女神に関わる信仰では、大祭礼（ナヴァラートリーなど）を除くと女性が主役となることが非常に多いのが特徴と言えるでしょう。

またこの儀礼にはどのカーストの女性も分け隔てなく参加します。かつてはダリト（厳しい差別を受けてきたカースト民）は別の社に参拝することが求められたことがあったと推測されますが、私が調査している地域では現在はそのような差別も見られません。

■ 質問者 B 様

天然痘やハンセン病にかかった人で、幸いと快癒した人についてですが、その後のその人たちの共同体での位置はどのようなものなんでしょうか。天然痘の場合、疱瘡跡が神の痕跡として、その人は神に愛された人として神に近いものになるのでしょうか。それともハンセン病もそうですが、見た目の違いから日本社会でのように差別、隔離の対象となるのでしょうか。それとも病以前と全く同様に暮らしていけるのでしょうか。天然痘の場合、根絶されて長く、先生がインドで調査研究された時期には対象者がいなかったかもしれません。ハンセン病などの事例でもし、先生が情報をお持ちなら教えてください。

<講師回答>

私が調べた限りでは、天然痘を生き延びた人びとがその容貌ゆえに差別されていたという記録はないようです。

ハンセン病者はかつて共同体から排除され、法制度上もさまざまな規制を受けて暮らさざるを得ない存在でした。ハンセン病者どうしが身を寄せ合い、物乞いなどをして路上生活を送る姿を大都市で見かけることもしばしばありました。現在は法制度上の差別は撤廃されています。ハンセン病者の人口自体も減り、路上で物乞いをする姿も見かけることはほぼなくなりましたが、偏見が全くなかったとは言えないと思われます。

■質問者 C 様

天然痘に関して、「インドのヒンドゥーの人々は人知の及ばないような偉大なものを神として崇める」というお考えが、ご発表の根底をなしていると受け止めました。

- 1、「ラジャスタン州だけでなく南部でも同様な思いである」、ようにうかがいました。インドは広いです。インドであれば地域が異なっても、考え方は同じなのだ、と捉えていていいのでしょうか。
- 2、インドにおける他の宗教の方々はどのように捉えておられるのでしょうか（キリスト教、イスラム教、仏教、ゾロアスター教では）。
- 3、ヒンドゥー教はインドだけでなく、東南アジアにも広がっていると思います。カンボジア、インドネシアなどのヒンドゥー教徒はインドのヒンドゥー教徒と同じ思いなののでしょうか。
- 4、さらに、宗教、気候、生活習慣、がインドとは全く異なる国々（アメリカ、日本など）に住むことになったインドのヒンドゥー教徒は、思いを変えていったりするのでしょうか。
- 5、三尾先生は、日本の一部で「痘瘡」を「痘瘡神」のように神と崇めた事実を根拠として、インドのヒンドゥー教徒の天然痘に対する思いと、日本人の思いいれ（自然観）に共通性を感じておられるように、（私は）受け止めました。日本人の、精神の根底に、人の手のおよそ及ばないものを崇め、そこに神を感じる思いがあるのは事実です（巨岩、巨木、etc）。ところで天然痘については、神の崇り、と恐れられていた時代があったと学校の歴史教育の中で教えられた記憶があります。天然痘を神の下す罰のようなものと捉えていて、「痘瘡神」として崇めた一部の人たちは別にして）、多くの日本人は天然痘そのものをインドのように「神」とは捉えていなかったのではないかと思うのですが、いかがなものでしょうか。

<講師回答>

1について。おっしゃる通りインドは広いので、全てで同じかどうか自信をもってはお答えできません。インドの人口の 8 割ほどをしめるヒンドゥー教徒は共通する信仰を持っていると思われます。

2について。他の宗教を信仰している人びとの間で天然痘がどのように捉えられていたのか、今後調べるべき課題としたいと存じます。

3、4について。これらの点はよく存じません。またこういった地域で特に天然痘女神がどのように信仰されているのかということについて、私が知る限りではほとんど調査研究がなされていないようです。今後の課題とします。

5について。私は日本人の信仰の伝統についても詳しくお答えできるような知識や経験がございません。ただ、講演でお話した通り、天然痘を疫病神と捉えるのではなく、歓待すべき存在と捉えるような態度で接していた伝統が日本の一部には見られたということは事例から推測できるようだと考えています。（なお、講演会で日本での事例として触れた鹿児島県薩摩川内市の「痘瘡踊り」は鹿児島県無形民俗文化財に指定されているものです）

■質問者 D 様

なぜ天然痘の神が「女」神なのでしょう。

「男」神や性別を問わないモノで語られなかった理由が気になりました。

なにかモデルとなるような物語が存在するのでしょうか。

また人痘接種師は、どのような言葉で神を称えたのでしょうか。

<講師回答>

講演の中で触れた通り、女神の中には「熱い」力を秘めた存在があるという信仰があり、それが熱病である天然痘を女神として捉えるという考え方につながっていたのではないかと推察されます。

シータラーマターの名はヒンドゥー教の古典文献群の一つであるプラーナーという文献群の中にも現れているようです。女神の図像もその文献に書かれている姿に基づいているようです。しかし、現在行われている儀礼においてその神話が語られたり、なぞられたりすることは、私の知る限りではありません。これは、講演の中で少しだけ触れたナヴァラートリーという女神祭礼とは大きく異なる特徴です。シータラーマター信仰は古典に起源をもつのですが、現在の信仰においては古典とは切り離され、より民間信仰的な性質を持つようになっていると考えられます。

人痘接種師が女神を称えながら接種を行ったという記録は英語文献に現れているため、インドの言葉で具体的にどのような言葉が唱えられたのかはよく分かりません。また人痘接種は既に行われなくなっているため、現地調査等でも明らかにするすべがありません。

■質問者 E 様

1、インドにおいて「新型コロナウイルス」はどのような存在なのでしょう。

冒頭で「撲滅なのか」という三尾先生の問いに対し、インドでの実際の受け止め方が知りたいと思いました。

2、「女神」=女性ですが、実生活の中では女性の社会的立場や、家庭での役割はどんな風なのか。

3、インドでは「死」んだあと、お墓は家の近くにあるのか。「墓守り」のような存在がいるのかといった、死んだ後どうして行くのか聞きたかった。

<講師回答>

1について。新型コロナウイルスがどのように受け止められているのか、ということについては現地での調査が全く行えておらず、確たることをお答えするのは難しいです。政府の対応やワクチン接種の進展、経済動向などは詳しく報道されていますが、人類学や民族学的な観点からの報告や調査はまだ公表されたものがなく、あまり進展していない（そういった調査を行うこと自体、調査者にとっても調査を受ける方々にとっても危険です）と思われる。人類学や民族学的な観点からの調査研究は現地への住み込み調査が基本となるため、成果が公表できるようになるには時間がかかることはご理解いただければ幸いです。現地調査が再開できたらしっかりと調べてゆきたいと存じます。

なお、講演会でもお話ししましたが昨年の流行の初期段階での社会の状況や今後考えるべ

き課題については、報道や現地の方への限られた聞き取りに基づいて短いエッセイを書き、毎日新聞の夕刊（大阪版）に連載しました。そのテキストと写真は、講演会の後で民博のホームページでも閲覧していただけるようになりました。

<https://www.minpaku.ac.jp/wp-content/uploads/202007chikyujin.pdf>

ご質問の内容からはそれるかも知れませんが、ご参考になれば幸いです。

2について。大変大きな内容のご質問で、一言でお答えするのは非常に難しいです。社会的にも地域、都市と村落、宗教などの違いによる多様性があり、また階層による差も大きいいため、「インドの女性」を一括りにしてお話しするのも難しく、またするべきでもないかと思えます。

インドの女性について近年出版された入門的研究書としては、専門的な内容が含まれていますが、『インド ジェンダー研究ハンドブック』（粟屋利江、井上貴子編。東京外国語大学出版会。2018年）は非常に質が高いと思えます。編者も執筆者も現代日本のインドのジェンダー研究の第一線の方々ばかりです。

また『インド文化事典』（丸善出版。2018年）の特に「家族・ジェンダー」の章もご参考になるかと思えます。この事典はいわゆる中項目型の事典ですので、特定のトピックやテーマについて比較的長い解説がまとめて書かれていますし、項目の配列はアイウエオ順などではなく内容的に関連するものどうしが近くに配列されるよう編集されています。また項目の解説は編集時の最新の情報や知見に基づいて書かれています。

これらは図書館でも比較的入手しやすいものかと思えますので、これらを手がかりにしてお考えいただければと存じます。

3について。ヒンドゥー教徒の大部分は墓を作りません。死後は火葬し、骨は散骨（理想的には聖地に行って水に流す）します。これは輪廻転生がつつがなく進むことを促すためとされています。死後も身体がこの世に残ると転生が出来なくなるという信仰があるのです。一方、イスラーム教徒やローマ・カトリックの信者は土葬し、墓を作ります。これは最後の審判で神の裁きを受ける際に身体を取り戻す必要があるという信仰に基づくものとされています。それぞれの信仰によって死生観が異なり、葬送の方法も異なっています。